の篇別に從つて第一篇社會學的方法論の問題。第二篇社會人口及び社會心意の問題。第三篇社會組織及び社會幸福の問題とに分ち、第一篇には、社會進化論の性質、社會法則の性質、統計的方法と歸納法。第二篇には、生死減少逆行の法則、貧富と出生率、分離論、社會的定量の法則。第三篇には、分業に就いて、家族の將來と社會の團結、資本家的集積說の研究、優生學是非、現代文明の淡妄——生產政策の否定等凡て十二篇の論文が收められてゐるのである。

收められたる論文は從來諸雜誌に公にされた數多い著者の論文中から比較的著者の意に滿ちたるものに近いものを收められたのであるが眞面目な學者的態度で眞理追求に餘念ない著者の思想は日々に發展擴充して猶部分的には變改された處も少くないことゝ信ぜられるし、且つ論ぜられたる題目凡てに亘つて此の紹介者自身が定見をもつて居るといふ譯でも無いからして此書閱讀の所感は不日公にせられるべき著者の「社會學的原理」を俟つて述べさして戴くが事宜に適つたことゝ思ふ。私は只此のセカンドハンドで無い著者自身の勞作によつて多大の裨益を受けたことをこゝに述べ併せて此の好著作を汎く一般同學の士に お奬めしたいと思ふ。

東京日本橋本石町寶文館發行。定價金貳圓。（銅直勇）

歐米の佛敎

渡邊海旭著

吾國は今や確かに東洋の中心點となつた、此威嚴からしても東洋の文藝研究だけでも獨立の研究を行ふべき責任がある、然るに支那文藝や歷史の研究すら少し複雜して來ると横文字の御厄介になる狀態である、而して東洋學特に佛敎學の方面には此憐むべき狀態は實に一層悲慘なものである、パーリでも梵語でも考古學でも歷史でも吾國佛敎學の前途遙遠である、吾々國民特に佛敎に關係を有し同情趣味を有する人々は此現勢に對し今や慷慨一番猛然奮起して自己の位置を顧みるべき必要がある、古人は臥榻の下他人の鼾睡を容さずと言つたが今の日本は自己佛敎學研究の臥床を全く歐米人に明け渡して、雷の如き鼾聲を發せしめ、自己は薄寒い室の一隅に畏る〳〵命令を待つといふ憐れむべき狀態である、吾々佛敎學研究に携はれる者、之に對して尙袖手傍觀すべきであらうか、尠くとも歐米佛敎研究の講學は吾國民、吾々佛敎徒に必ず一種の激勵を與へよう、吾國が思想の眞自由學問の獨立に向つて最も適切で且つ手近な努力を鼓吹するだらう、而して東方經營の自覺上歐米の佛敎研究は吾々に幾多の鞭撻を與へ前進を敎へて呉れる、今や吾國の識者財產家所有る敎育ある階級に向つて歐米學者の佛敎研究に向つて眼を開けと呼號する事は東方の經綸上實に止むべからざる苦言として見て頂き度い、埃及博覽會が極めて小規模ながら一部識者に多大の隨喜を買つた今日、何故吾が國民はもつとアジャンタの壁畫や千闥高昌の古經斷片に注意する樣にならぬのだらう。本書出現の目的蓋しこゝにあるのである。

由來吾國に於ける佛敎は一言以て之を掩へば傳道と信仰の佛敎であつた反之歐米に於ける佛敎は要するに批評と研究の佛敎である、約一百年に亘りて研究された歐米の佛敎は實に內容の充實したものであつた、ずつと古い所で佛國で法華經の佛譯が出ればコロンボでマハーヴンサの英譯が公表される、西藏の研究が盛に始

まると共に印度の發掘がどし〳〵進捗して碑銘や刻文の調査が兩の如く報告される、佛教原本の翻譯研究批評は踵を接して出版される、近くは千闥の發掘が纔かに終ると、直ぐ高昌の掘り出し物が世人を驚かすといふ風に、重要な事件は暮去朝來連續して起り、殆ど應接に遑なきの觀がある、著者はかくの如く複雜せる歐米に於ける佛教研究の歷史と現狀とを攝みて、何處まで佛教に對する調査が歐米に於て進んで居るかを大觀し、その藝術や歷史や地理や教理や聖典に關してどの位重要にして貴重な資料の蒐集が出來、整理が出來たかを事實に基いて概觀し、尙且つそれ等批評研究の結果歐米思想上に與へた影響や實際信仰の勢力となつた實狀までも之を叙述し、而して佛教學研究に携はつた代表的學者の學歷や性格を巧みにその間に雜へ、讀者にそれ等學者の惡戰苦鬪眞摯熱烈の研究的態度を彷彿せしめ吾國民の再思三省奮起躍進を促して居らるゝ、著者赤心の絶叫は全篇に充ち、血涙迸り出づるの概がある、「日本に於ける思想家文藝家として、世界的の貢獻をなさんとするには佛教に關する研究や創作の發表が適切で、且つ有利な捷徑であらう、唯識論でも起信論でも充分に咀嚼し體得して之を近世的に叙述することの出來る腕のある學者」の出現を望むものは啻に著者のみではないのである。私は双手を擧げて吾國一般讀書界に本書の一讀を勸め、佛教の世界的研究の氣運をお互に味つて見度いと思ふ。

目次大要、(一)パーリ聖典の研究、(二)梵語佛教聖典の研究、(三)支那佛教の研究、(四)西藏佛教の研究、(五)印度學研究上の佛教(六)西域發掘の佛教、(七)歐米に於ける佛教の感化。東京丙午出版社發行、菊版二六〇頁、定價壹圓五十錢。(本田義英)

大乘起信論精義

(附兩譯對照大乘起信論)

隅部慈明著

「大乘起信論は佛教教々理の眞髓を最も簡潔に最も論理的に記述したる唯一の書である、實はゞ佛教概論ともいふべきもので、」隨つて古來本論の講義は澤山にあるのであるが、「しかし現在これを學ばんとする人にとりて適當な書と言へば甚だ尠い」、著者はその缺を補ひ、且つまた著者が著者の見る所をも書いて見度いと思はるゝ所から本書は生れたのである。

序講に於て著者は本論現出に關して教會史的の意義を略述し、その著者、譯傳、所依の經典等に就て叙述せられて居るが、併しそれは「古來の說によりて」述べられたものであるから玆に之を取り立てゝ紹介するの必要もなからう、馬鳴と龍樹と起信論との關係に就ても「充分研究の後でなければ確說する譯には行かぬ」と述べられて居るのである、併し著者が從來の說に隨ひ本論の作者を以て馬鳴として居らるゝ態度は疑ふ事が出來ない、「論には」とでも言ふべき所に「馬鳴は」として居らるゝのはその一例證である。序講第六章「起信論一部の大意」は著者自らの研究に依り簡明に要領を得た一章であつて著者苦心の痕が見えるのである。

本論に入りては順次論文の一々を擧げ分科分項或は本末の關係を以てし或は問答の體を以てし詳細にして通俗平易なる講義が試みられて居る、而して未だ佛教の專門語に熟達してゐない者のために句釋を附し難澁なる佛教術語解釋の資料に供せられて居る、